

センサーは人に代われない

介護の現場

2021年報酬改定

(4)

心に寄り添つて

政府は4月からの介護報酬改定にて、すべての利用者のベッドへの見守りセンサー導入や、夜勤職員全員のインカム（業務連絡用のマイク付きイヤホン）使用などを条件とした、従来型特養などの夜間の職員配置基準の緩和を盛り込みました。

「夜勤中は通常業務に加えコール対応があり、イレギュラーな事故が加わることもある。利用者が転倒して頭を打ち血だらけになっていたこともある。事故は必ず職員2人で確認、対応する。夜間当番看護師に電話報告し、問題があれば緊急搬送。1人は病院に付き添い、1人はフロアに残り入居者の対応をしなければならない」

東京都葛飾区の特別養護老人ホーム（従来型特養）で働く福田剛さん（36）は、夜勤の厳しい現実をこう語ります。

特養の夜勤のスケジュール

16:30	出社	夕食に向けた用意
18:00～	夕食介助	夕食の介助。服薬支援
19:00～	寝かせ準備	食べ終わった人から歯磨き、パジャマへの着替え、排せつ介助
21:00～	記録作成など	入所者1人1人の記録作成。床の食べこぼし清掃。翌日に向かお風呂、薬、排せつ台車の準備
22:00～	職員夕食	夕食・休憩
23:00～	排せつ介助など	排せつ介助・トイレ誘導、体位交換
00:40～	職員仮眠	1人ずつ2時間の仮眠
05:00～	陰部洗浄	入浴していない利用者全員の陰部洗浄
08:00～	朝食介助	疲れがたまり、食事介助のために座ると立つのがしんどい
09:00～	片付けなど	朝食の片付け、記録、日勤への申し送りなど
09:30	退社	

81～100人の夜間の職員配置基準は現在4人。4月からは条件を満たせば3・2人（常勤換算、1人16時間勤務）になり、さらに常時配置しなければならない職員は2人になります。夕方や明け方だけ4人体制にし、深夜は2人体制にすることも可能です（入所者60人以下の施設の常時配置は1人）。

「仕事の大部分は食事・入物の2階と3階にそれぞれ最物の2階と3階にそれぞれ最大48人が入所します。入所者

81～100人の夜間の職員配置基準は現在4人。4月からは条件を満たせば3・2人（常勤換算、1人16時間勤務）になり、さらに常時配置しなければならない職員は2人になります。夕方や明け方だけ4人体制にし、深夜は2人体制にすることも可能です（入所者60人以下の施設の常時配置は1人）。

「旅立ち」の看護をするのも職員の仕事です。事故や亡くなる人が出ると仮眠がとれず、退勤まで一睡もできないこともあります。

人員増こそ必要

「やインカムで負担が軽くないことはない。寝たきりやまひがあって動けない入居者もいるのに、センサー100%設置が条件というのもおかしい。センサーが入所者にとっての監視装置になれば、その人らしさを大事にした家庭的雰囲気が壊される」

政府は職員配置基準の緩和は介護の人手不足対策と主張しますが、現場からはむしろ人手不足を加速するとの批判が上がります。

福田さんの職場は階ごとに職員の勤務表が異なり、階同士の連携も基本的にありません。「今でもいっぱいいっぱいの体制。職員を減らすことは考えられない」といいます。夜勤は夕方4時半から翌朝9時半まで。入所者には認知症の人が多く、深夜に歩き回ったり、興奮して大声を出したりする人もいます。職員が話を聞いたり、一緒に歩いたり、それぞれの入居者に合ったスタイルで心に寄り添い、気分を落ち着けます。

「モノではなく人を相手にする介護は本当にやりがいのある素晴らしい仕事。利用者や家族の笑顔、感謝の言葉で救われる。それでも待遇が改善しなければ人手不足は解消しない。必要なのは人を減らすことではなく、増やすことだ」

特養はついの住み家でもあります。深夜に利用者が亡くなることもあります。医師や家族に連絡し、体をきれいにして久間亮が担当しました

（おわり、連載①～③は10月12日付に掲載。この連載は佐久間亮が担当しました）